

シェーンベルク《映画の一場面のための伴奏音楽》の作曲過程とその背景
——未発表の構想メモと1920年代の映画の伴奏音楽との関連——

白井史人

アルノルト・シェーンベルク《映画の一場面のための伴奏音楽 *Begleitungsmusik zu einer Lichtspielszene*》作品34は、1929年秋から1930年2月にかけて作曲された。全曲が12音技法に基づき、「迫りくる危険」「不安」「破局」という3つの副題が添えられているが、特定の映画のための伴奏音楽ではなく、演奏会用作品として作曲された。

先行研究では、シェーンベルクは副題間の場面展開を考慮していないとされてきた。しかし、2011年出版のシェーンベルク著作目録で、副題と深い関連を持つ「構想メモ」の存在が発表された。本論文は、この構想メモの記述を手掛かりに、《映画の一場面のための伴奏音楽》と1920年代の映画伴奏の言説・実践との関連を明確化することを目的とする。

第1節では、ラオホ (Rauch. *Die Arbeitsweise Schönbergs*, 2010) の分析方法を参照し、草稿に基づく作曲過程の分析を行った。「構想メモ」の検討を通じてシェーンベルクが3つの副題の間に場面展開を構想していたことを示し、その場面展開を強調していく推敲過程を明らかにした。第2節では、シェーンベルク自身や後妻・ゲルトルーテのスケジュール帳、トーキー映画技術者であるグイド・バーギエの遺稿の調査を通じて、1920年代のシェーンベルクと映画産業との人的交流を示した。無声映画からトーキー映画への移行期に、シェーンベルクがトーキー映画へ高い関心を示した点が明らかになった。第3節では、本作の成立の背景となる同時代の映画館での伴奏音楽の実践・言説を、映画音楽専門誌『フィルム・トーン・クンスト』を中心に検討した。同時代の実践・言説が、伴奏項目の恣意的な羅列に対する批判や映画作品全体に即した劇的展開を重視するなど、本作と共通する傾向を持つ点を明らかにした上で、音楽語法や楽曲の抜粋法の面で大きな齟齬がある点も指摘した。